

学生を活かすまちづくり：
静大フューチャーセンターの取り組み
(生涯学習指導者研修事業「公民館の力を磨く」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古川, 未帆, 奥洞, 知依 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009484

事例報告

学生の力を活かすまちづくり 静大フューチャーセンターの取り組み

古川未帆・奥洞知依（静岡大学フューチャーセンター運営学生）

■自己紹介

古川——最初に、私たち2人の自己紹介を簡単にさせていただきます。私は昨年、大学3年生のときに「らぶしずインターン」で静岡のおまち（中心市街地）を盛り上げるためのイベントの企画・運営に携わり、そこで出会った先輩に誘われて静大FC（フューチャーセンターの略称）に関わるようになりました。FCでは様々な立場の方と関わるので、そこでの縁をきっかけとして、今では「きやりこみゅ²」という団体の活動に関わったり、今年は「大道芸ワールドカップin静岡」のボランティアに参加したりもしました。また、静大FCには静大以外の学生や社会人も来るので、他大学の仲間や社会人の先輩がたくさんできて、FCに関わるようになってから爆発的に人脈が広がりました。ちなみに私は人文社会科学部の4年生で、ただいま卒論に奮闘中です。これから追い込みを掛けて頑張っていこうと思っています。

奥洞——皆さん、こんにちは。静岡大学農学部2年の奥洞（おくぼら）です。早いもので大学2年生も後半になりました。今回の発表を機会に私がこれまでしてきた活動の原点を振り返ってみると「せっかく〇〇だから・・・」という思いが基にあることに気が付きました。「せっかく静岡に住んでいるから」お茶に関する活動に関わったり「大道芸ワールドカップin静岡」にボランティアとして参加したり、「せっかく農学部に入ったから」農村と人の暮らしに触れて学ぶ富士宮市稲子での農業環境演習に楽しさを見出したりしています。私が静大フューチャーセンターに関わるようになった理由も単純です。「せっかく大学生だから」いろいろな人と関わりたいと思い、人との交流が活発だと聞いて参加したことがきっかけで、今こうしてこの場にいます。

■フューチャーセンターとは何か

長々と自己紹介しましたが、本題に入りたいと思います。まずは静大フューチャーセンターについてではなく、一般的なフューチャーセンターとは何かというお話をさせていただきます。皆さんの中で、フューチャーセンターという言葉聞いたことがある方はいらっしゃいますか。ちらほらいらっしゃいますが、説明してくださいと言われてたらどう言われますか。

フロア——フューチャーセンターには、企業がやっているものなど、いろいろありますが、私はそれこそ自治会主催のフューチャーセンターができたと思っています。ざっくりばらんに言うと、フューチャーセンターとは未来を考える会ですよ。

奥洞——ありがとうございます。こう聞くと、誰からも手が挙がらなかったり、逆に三重で出張FCをした時には、皆さんから手が挙がってこちらが驚いてしまったりしたこともあったのですが、今説明していただいたように、未来（フューチャー）という部分をとても大切にしています。もともとは北欧発祥の考え方で、『フューチャーセンターをつくろう—対話をイノベーションにつなげる仕組み』という本の言葉を借りると、フューチャーセンターとは「人と人とのつながり」の場であり、「対話のための専門空間」であり、「企業や社会の変革装置」ともなり得ます。つまり、非常に定義しづらいのですが、今回は私たちがなりに説明していきたいと思っています。

本日はいろいろな立場の方がいらっしゃると思いますが、少子化、高齢化、環境、雇用、観光など、社会や地域で抱える課題はその人の立場の数だけあり、複雑化しているといわれます。例えば企業は「商品PRを効果的に進めるには・・・」、あるいは地区自治会は「地区の活動に多世代が関わるには・・・」というように、様々な悩みを抱えていると思います。そのときに、コミュニティ単体でそれらの課題に取り組むには限界があるのではないか、課題を抱える当事者同士が互いの立場を尊重して、一緒に取り組むことができないかという考えがフューチャーセンターの大元にあります。大学生、地域のパパさん、NPO、ファシリテーター、スーパーの店長、行政、メーカーなど、多様な方がいるなかで、それぞれの立場を尊重し合って共にアクションへ移そうという活動です。アクション（行動）につなげることもとても大事なのですが、フューチャーセンターというのは施設の名前でもなければサークル活動でもなく、社会人や大学生がふらっと関われるようなプラットフォームだと考えています。

フューチャーセンターには、私たちがいつも大事にしていることが三つあります。一つ目は多様性です。例えば社会人と言っても勤め先、年齢などさまざまです。また、学生と言っても、例えば古川さんは人文社会科学部4年生、私は農学部2年生と、所属が異なります。そのように個々の多様さをどんどん認めていけるような場にしたいと考えています。

二つ目は対話です。せっかくいろいろな人が集まる場があっても、否定的なことばかり言う人や、ずっと自分ばかりが話してしまうような人がいると、意味がありません。ですから、フューチャーセンターには、相手の立場を尊重して話しやすい雰囲気をみんなで創ろうというルールが決められています。自分の引き出しと相手の引き出しを少しずつ出して行って、良いものをつくっていきましょうということです。

三つ目は未来志向です。こちらが非常に大事です。多様性にあふれていて、対話もしやすい、非常に良い場ができた。それでは実際に社会の問題を考えていこうというときに、過去の先例にしばられては何も進みません。ですから、まずは未来志向を持って、私たちにどのような未来がとれるか、どのような未来があったらいいかといったことを、みんなで考えていきます。その上で、多様な人が集まっているので、「私ならこういうアプローチができる」「僕ならこういう一歩が踏み出せる」というところを見つけて、そこから未来に向かって進んでいこうというのが未来志向だと考えています。

図1は日本のフューチャーセンターの広がりを示したものです。フューチャーセンターは特別な場所だと思われるかもしれませんが、日本には多くのフューチャーセンターがあります。この地図では静岡には二つしか書いてありませんが、図2のように実はもっと多くのフューチャーセンターがあります。つまり、日本全国にももっとたくさんあると考えられます。どこにでもでき得るのです。

静岡のフューチャーセンターは、4年前（2011年）に静岡県立大学の国保ゼミが始めたのがきっかけです。2年前（2013年）に私たちの先輩が静大でも開きたいということで静大フューチャーセンターが始まり、広がりを見せています。特徴は固定メンバーではないことです。私は静大フューチャーセンターの運営を務めています。参加者は毎回異なります。最近、静大の中でも1~4年生までさまざまな学年の人がセッションに参加してくれていますし、初めての方や社会人の方



図1 日本のフューチャーセンターの広がり / <http://www.future-center.org/futurecenter/>



図2 静岡県内のフューチャーセンター

まで幅広く来てくださっていて、静岡県内のフューチャーセンターを参加者が歩き回るといって、非常に面白い図ができています。

最近、私がフューチャーセンターに関わっていると思うのは、「若者は新聞を読まなくなったよね」「介護はすごく問題だね」と言われても、私たち大学生の感覚では社会問題はまだ他人事で、それを「若者は興味がない」「感心がない」と言われても、どうしていいのかわからないところが大きいのです。でも、フューチャーセンターというプラットフォームを通して「私は今、介護職に就いているんです」「今、記者をやっているんです」といった当事者と出会うと、その偶然の出会いによって社会問題が自分事に落とし込まれて、初めて社会に対して「自分はこれからどうやって生きていこうか」「こういう問題も自分とすごく絡んでくるのだな」と考えるようになるということです。対話というのは遠回りのようで、私たちが社会（問題）と関わりを持つときの近道なのではないかと思うようになりました。

ここまでフューチャーセンターについてお話ししましたが、次は私たち静大フューチャーセンターの関わりについて、古川さんに話していただきます。

■静大フューチャーセンターについて

古川——奥洞から説明があったように、静大フューチャーセンターは2年前の夏に記念すべき第1回、静大フューチャーセンターvol.1を開催し、始まりました。来月12月10日に行われる回でvol.38となる予定ですが、ナンバリングされていない番外編のセッションも含めると、全部で50回以上はセッションの場を創ってきました。具体的にどのようなテーマで、どのようなセッションをしてきたのか、3つ取り上げてご説明したいと思います。

図3は、「新聞の未来を学生と一緒に考えたい」「若者にもっと新聞を活用してもらいたい」という記者の方の思いから行われたセッションです。8月31日、10月8日の2回に分けてセッションを行いました。2回のセッションで学生・社会人含めて総勢29名と、とても多くの方にご参加いただきました。1回目のセッションでは新聞の価値について、2回目のセッションでは、1回のセッションの内容を踏まえた上で、実際に大学生は新聞とどのように付き合っていけばいいかを考えました。このセッションは、セッションのテーマを持ち込んでいただいた新聞記者の方によって記事にして新聞に取り上げていただきました。

図4は、静岡大学3年生で心理学を専攻している学生の「大学生が悩みを出し合い、話すことによって心が軽くなるような場をつくりたい」という思いから行われた、「大学生」×「悩み」についてセッションです。大学生の悩みにはどのようなものがあるのかという話から始まり、実際に参加者の方の悩みを出していただきました。そして参加者の実際の悩みを見ながら、大学生の悩みを軽くするためにはどのような場があるといいのかという話をしていきました。奥洞はこのセッションで「FC（フューチャーセンター）の可能性をすごく感じた」と感銘を受けたようです。

図5は、静岡県介護保健課の方にテーマを持ち込んでいただいて開催した、「出張！介護の未来セッション」です。近い将来、介護の人材が足りなくなるという予測から、「若い人にもっと介護に興味を持ってほしい」ということで、介護に関するセッショ

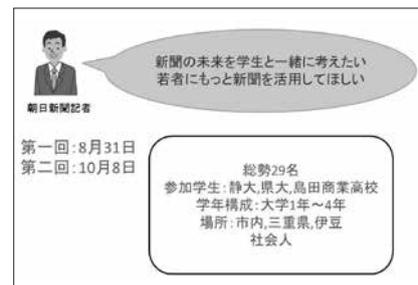


図3 セッション事例1「新聞の未来を考える」



図4 セッション事例2「大学生」×「悩み」



図5 セッション事例3「出張！介護の未来」

ンを3回に分けて行いました。「出張」と言っておきながら、第1回はいつも通り宇賀田先生の研究室で開催し、介護の未来を良くするために私たち住民が何ができるかを考えました。第2回からは県庁の会議室を使わせていただいて、介護の未来を良くするために行政（県）が何をしたらいいのかを話し合い、第3回では第2回で出した案を踏まえながら先に対象者を絞り込み、より詳細に介護の人材確保のための事業を考えていきました。ちなみに今年度も、介護に関するセッションを計画中です。ここまで3つのセッションについて紹介してきましたが、私たちはいつもセッションが終わった後にFacebookにレポートを書いているので、更に詳しい内容や、この他のセッションにご興味のある方は静大フューチャーセンターのFacebookページをご覧ください。

運営体制としては、学生支援センターの宇賀田先生の強力なバックアップの下、現在は私たちを含む学生ディレクター4名が主体となって活動しています。そこに学生や社会人など多様な方、例えば先ほどの新聞記者や心理学を専攻している学生、県の介護保健課といった方がアジェンダオーナー（セッションのテーマを持ち込む人）となってテーマを持ち込みます。私たちはアジェンダオーナーと打ち合わせをしてセッションの流れを考えたり、Facebookでイベントページを立てて参加者を集めたり、当日のおつまみを調達したりしてフューチャーセンターの場づくりを行っています。また、以前は学生ディレクターとは別にファシリテーターを立てていたのですが、現在は私たち学生ディレクターがファシリテーターを兼任し、参加者がよりスムーズにセッションを行えるようお手伝いをしています。ファシリテーターとは、場の主導権を握る司会やリーダーとは異なり、場が円滑に進むお手伝いをするようなサポート的な役割だと考えていただければいいかと思います。フューチャーセンターでは、あくまでも主役は参加者の方々です。

私たちはいつも学生ディレクターとして静大フューチャーセンターにいますが、運営を通して気づいたことや考えたことがあります。私は学生だからこそ社会人に言えることもあると感じていて、学生はもっと主体的に行動し、時には社会人同士では言えないようなことを言って、学生の方から社会人に圧をかけなければいけない場合もあると感じています。奥洞は、最近はフューチャーセンターでできることがもっとあるのではないかと感じているようです。ゆくゆくはフューチャーセンターに関わったことで、静岡を好きになって静岡に残る学生が増えてほしいと考えています。

図6は島田フューチャーセンターです。静大フューチャーセンターの妹分のような存在なのですが、社会人はもちろん、静大FCの現役学生ディレクターとOBの方々、静岡県立大学のフューチャーセンターの方々立ち上げに携わり、島田商業高校に日本初、もしかしたら世界初の高校生が運営する常設のフューチャーセンターができました。



図6 新聞記事（静岡新聞2015年9月20日朝刊）

■まとめ

おさらいすると、フューチャーセンターとはコミュニティではなく、プラットフォーム（場）です。サークルや部活動などのように固定メンバーがいるコミュニティではなく、参加者は流動的で、毎回参加者が変わる、人と社会の課題のプラットフォームのような存在です。そして、リーダーや司会ではなく、ファシリテーターが支援しています。また、セッションは参加者の対話を中心に進めていくのですが、場合によっては質問やブレインストーミング、KJ法といった話し合いの手法も用います。それから、フューチャーセンターでは、アイデアを出すことよりも、参加者がセッションテーマに対して当事者意識や問題意識を持ったり、新たな視点や気付きを持ち帰ったりすることを大切にしています。私たちは学生ディレクターとしてフューチャーセンターに携わっていますが、あくまでも主役は参加者1人ひとりです。静大FCに来て様々な視点や気付きを持ち帰っていただき、そこから1人ひとりがアクションへ動きだせば、より良い

未来が待っているのではないかと考えています。

次に、私たち版のフューチャーセンターとは何か、考えていることを書いてみました（図7）。まず、新しい出会いの場ではないかと考えています。出会いというのは、人との出会いということもありますが、物や事との出会いもあります。先ほど私は「大道芸ワールドカップin静岡」のボランティアに参加したとお話ししましたが、それもフューチャーセンターの場で出会った方に誘われて参加したものです。そのようにフューチャーセンターは様々な人・物・事に会える場ではないかと考えています。

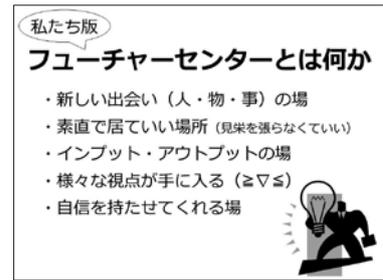


図7 私たち版のフューチャーセンターとは

奥洞——私は、素直で居ていい場所だと思っています。多様性を認めていこうという柱の下で活動しているので、集まるのは専門家だけではありません。ですから、そのテーマについてよく知らない人からの意見も実は非常に大事で、テーマを持ってきた人に「自分たちの周りだけで話していたら、このような視点は忘れていた」と喜んでもらえるのがすごくうれしいです。

古川——また、フューチャーセンターはインプット・アウトプットがものすごく沢山できる場だと思えます。フューチャーセンターでは多様なテーマを扱うので、普段同じ学科の学生同士では話をしないようなテーマについて、インプット・アウトプットができます。また、立場の異なる多様な人が来るので、「そういう見方・考え方もあるのか」と、さまざまな視点も手に入ります。それから、フューチャーセンターに参加した感想を参加者にインタビューした際、「自分も自信を持って発言していいのだと思えた」と言ってくれた学生がいたこともあり、参加者に自信を持たせてくれる場でもあると感じています。他にも「就活でもいけるかも」「FC、楽しい」と言ってくれた学生もいました。

最後に、「1人ひとりの気付きとアクションが未来を創る」ということで、私たち学生ディレクターはあくまでも“フューチャーセンター”というプラットフォームの場づくりのための人間です。未来を創っていくための主役は、私たち学生ディレクターでも、フューチャーセンターでもなく、参加者1人ひとりであるという思いで、いつも活動しています。

質疑応答

コーディネーター——今の短いお話を聞いた中でも、フューチャーセンターと公民館や郷土センターが担っている役割、目指すところは非常に似ていると個人的には感じました。基調講演では、安城公民館の藤井主事から、出会って、交流して、地域課題に取り組んで、いろいろな成果を生み出していき、また次の世代につながっていくという非常に素晴らしいご報告を頂きましたが、このフューチャーセンターも非常に似たところを目指していて、参考になるのではないかと思います。せっかくですので、ご質問等があればお願いします。

質問——フューチャーセンターの話は以前から常葉大学内でも伺っていたのですが、周りに参加している人があまりいません。フューチャーセンターの周知、広報はどのような形でしていますか。

古川——FacebookやTwitterを使用して情報発信をしています。それだけではなかなか認知度が上がらないところもあって、現在は参加者の「あそこ面白くていいよ」という口コミが、一番強力な周知方法になっているのではないかと感じています。広報は依然として課題です。

コーディネーター——公民館という施設にも、社会教育という営みにも、非常に関連していると思えます。あちこち出張に行かれているということで、1泊2日の松崎町でのセッションなど、県内だけではなく、県外からも引き合いがあったりして大変忙しいのですが、静大フューチャーセンター情報局という

Facebookのページがあるので、そちらも含めてご覧いただければと思います。今後ともコンタクトあるいはコラボする機会がありましたら、ぜひよろしくお願ひします。